

平成 31 年 4 月 30 日現在

機関番号：10102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K17066

研究課題名(和文) 思想的伝統としての現実主義 形成過程の遡行による再考

研究課題名(英文) Reconsidering the Realist Tradition: A Genealogy of Its Invention

研究代表者

西村 邦行(Nishimura, Kuniyuki)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：70612274

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 500,000円

研究成果の概要(和文)：一般に、トゥキユディデス マキアヴェッリ ホブズの連なりとして描かれる現実主義の思想的伝統について、そのような認識がいつどのような意味を帯びて成立したのかを、主として戦後の国際関係論および政治思想史の文献を渉猟するなかで分析した。結果、概ね1970年代から1980年頃がその成立時期であること、その成立が個別具体的な歴史から普遍的な理論へと向かう志向の強まりと軌を一にしていたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国際関係論および政治思想史における基礎研究として、本研究の意義は主として学術的な意義に求められる。具体的には、戦後国際関係論において歴史的思考を阻む傾向が現実主義の伝統という装置をもって埋め込まれていることを明らかにした。加えて、このような傾向が、政治理論一般を含み20世紀アメリカ思想史上に位置づけられる傾向である点について示唆を得た。

研究成果の概要(英文)：In International Relations theory and history of political thought, the philosophical tradition of political realism is often depicted as the development from Thucydides to Machiavelli and Hobbes. By analyzing academic books and journal articles published in postwar Anglophone academia, this study attempted to reveal how, when, and why this view of history was invented. It proved that the paradigm gradually established its position during 1970s and 1980s, when scholars were getting more and more inclined to adopting general theoretic analysis while staying away from historical analysis.

研究分野：国際関係論

キーワード：現実主義

## 1. 研究開始当初の背景

現実主義は、端的には、政治を権力闘争として描く視座とされる。また、その伝統はしばしば、古代ギリシアのトゥキディデスに始まり、マキアヴェッリ、ホブズへ継承されていくものと語られる。ただ、内実はより複雑であり、具体的な定義も困難なら、ここに挙げた思想家たち相互の関係も自明ではない。この問題は、近年さらに切実さを増している。それは、国際政治学と政治哲学における次の動向に拠る。

- ・国際政治分析の理論としての現実主義は、世界情勢の変動を受けて、冷戦終結前後からまたまった見直しが始まった。この動きは、その知的伝統についての問いなおしも招いた。具体的には、E・H・カーなど、旧い世代の論客が改めて評価されるようになった[Cox 2000]。同様の読みなおしは、さらに、ホブズら上記の思想家たちへも波及していった[Lebow 2003; M. Williams 2005]。結果、権力闘争の現実を見据えたとされる現実主義者たちが、他方で政治の漸進的な改良を展望していた点に関心が集まっていった。
- ・政治哲学的な思惟が現実世界へも示唆を持ちうることを示したJ・ロールズ『正義論』(1971)は、実証分析に傾いた戦後政治学の中に規範理論を復権させるものであった[藤原 1979]。その後の規範的政治理論は、彼への批判と修正を軸に展開されてきたとも言える。対して、それら一連の議論もまた現実から遊離した観念論であるとの批判を成すのが、近年の現実主義である[B. Williams 2005; Geuss 2008]。ここでは、国際政治学におけるのとは対照的に、観念的な規範論に禁欲的な立場としての現実主義が、同じホブズらの伝統を引き合いに、改めてその意義を認められている。

こうして、同じ思想史的な伝統に棹差す同じ現実主義という語は、今日、論者ごと分野ごとに異なるニュアンスで用いられている。しかも、こうした揺れは、知的伝統としての現実主義が実践的な性格を新たに認められる中でこそ顕著になってきている。この点、現実主義という語の意味作用を問いなおすことには、今日的な意義があると考えられた。

## 2. 研究の目的

上記の背景に照らして、本研究は、現実主義の意味内容を問いなおすことを目指したものである。ただ、その中核を掘り起こすための理論的な考察などは、本研究が主として試みたところではない。代わりに、本研究では、現実主義の語用法を対象とすること、歴史的な視点から問題を捉えること、の二点を旨とした。先行研究が示している上記の状況に鑑みると、「本当の現実主義とは何か」といった検討の仕方は、出発点となる問いの立て方からして間違っているように思えたためである。言い換えるならば、本研究で立てられた問いは、「現実主義の本質は何か」ではなく、「現実主義という語はどのように用いられてきたか」であった。そのうえで、具体的には下記の方法でこの問いに答えることとした。

## 3. 研究の方法

「現実主義という語はどのように用いられてきたか」を検討するといっても、漠然と文献を渉猟して語用法の変遷を辿るといふわけにはいかない。文献を選定するうえでも焦点となる何かしらの軸が必要である。その点を考えた際に、本研究で着目したのが、現実主義の成り立ちを語る思想的伝統についての記述である。つまり、上記したトゥキディデス、マキアヴェッリ、ホブズという思想家らについて、どの思想家がいつどのような意味で現実主義と結びつけられていったかという、「伝統の創造」過程を検討することとしたわけである。この視角からアプローチすることによって、現実主義の意味内容の継時的な変遷と同時代的なばらつきの方角を見ることが可能になるものと考えられたためである。具体的には、国際関係論および政治思想史に属する文献を中心に、主として英語及び独語で20世紀以降に書かれたテキストを解釈の俎上に載せた。例えばホブズについては、現実主義者と呼びならわされるようになったのが第一次世界大戦前後ともされる[Armitage 2013]。この点からも、世紀の境目を目安とするのは妥当と考えられた。

## 4. 研究成果

(1) トウキディデス マキアヴェッリ ホブズの連なりとして描かれる現実主義思想史の記述がいつどのように開始されたのかを検討していくなかで、まずこの問いを考察する前提に関わる部分で明らかになったのは、このような思想史記述の型が、特定の文献ないし研究者によって明示的に形成されたものではないということである。

トゥキディデス マキアヴェッリ ホブズによって現実主義の思想的伝統が代表されるという認識自体は、今日出回っている国際関係論の教科書や概説書に目を通すだけでも確認することができる。ただ、そのうえで、それらのほぼすべての書において、この伝統認識が誰のどの議論に由来するものかという出典が示されることはない[e.g. Donnelly 2013; Jackson and Sørensen 2016]。

この事実は、単にそれらが教科書・概説書だからということだけに拠るのではない。ひとつには、それらのテキストにおいて、他の事柄に関しては明確に出典を示しているようなものも

あるからである。加えて、トゥキュディデス マキアヴェッリ ホッブズという型がより漠然としていた、もう少し前の時期の文献、具体的には1990年代の諸テキストにあたって、この点に関する状況は同様だからである。当時、トゥキュディデス マキアヴェッリ ホッブズという型を打ちだしていた専門書ないし準専門書においても、この認識の由来がどこかは必ずしも示されていないのである[e.g. Boucher 1998; Doyle 1997]。

そのうえで、出典が示されている例外的な文献を見てみると、その当の引用文献のいずれにおいても、トゥキュディデス マキアヴェッリ ホッブズという型など明記されてはいないことが判明した。それらの引用文献では、たとえば、トゥキュディデスだけが、あるいはマキアヴェッリだけが、現実主義の思想家として触れられてはいる。けれども、三名の思想家を並べて現実主義者と名指しているような文献は見当たらない。にも拘わらず、それら文献を引用する側は、トゥキュディデス マキアヴェッリ ホッブズという型でもって現実主義の伝統を描いているわけである[e.g. Olson and Groom 1991]。

(2) 以上のような結果を受けて、では、いつから、なぜ、どのような意味を込められて、トゥキュディデス マキアヴェッリ ホッブズという型が研究者の一般的な認識として広まることになったのかということが改めて問題となる。この点について、まず、いつから、という点で言えば、概ね1970年代から1980年代にかけてというのが、本研究から得られた結果である。

先述のように、今日の教科書類では既にトゥキュディデス マキアヴェッリ ホッブズの型が定着しており、先立つ1990年代の文献では出典の「誤読」を経てその先鞭が付けられていたことがうかがえる。他方、それ以前になると、トゥキュディデス マキアヴェッリ ホッブズという型はしばしば揺らぐ。具体的には、このうちの誰かが触れられていなかったり、代わりにカウティリヤや孫子などの西洋圏外の思想家が触れられていた李、あるいは、三名とも触れられている書でも各人が国際思想に為した知的な貢献の意味はばらばらであったり、といった具合である。この状況は、時代を遡るほどに顕著となり、1960年代を大まかな境目として、それより以前となるとトゥキュディデス マキアヴェッリ ホッブズという型はかなり明確に揺らぐ[e.g. Holsti 1967]。

(3) そのうえで、傾向として言えば、マキアヴェッリは古くから現実主義者という名指され方が定着しており、1950年代の諸文献でも、そのような評価は多く見られる[e.g. Morgenthau and Thompson 1950]。他方、ホッブズについては、マキアヴェッリと並べて触れられることも少なくはないが、近代国家主権の理論家という位置づけられ方がより一般的であり、ロックといった自由主義者と同列に扱われていることなども珍しくない[e.g. Palmer and Perkins 1953]。最後に、トゥキュディデスに関しては、ほとんど出てこない。より正確に言えば、名前は触れられていても、ある種の例外として扱われている。このことから、マキアヴェッリに薄くホッブズが結び付けられており、そこにトゥキュディデスが加え入れられていくところに、トゥキュディデス マキアヴェッリ ホッブズ型認識は成立を見たものと考えられ、また、それがなぜ起こったのかを解き明かすことで、そこに込められた現実主義という概念の含意も明らかになるということが期待されるところとなった。

(4) そのうえで、トゥキュディデスが例外と扱われている、その扱われ方に注目したところ、そこにもやはり一定の傾向が見られた[e.g. Waltz 1959; Wight 1960]。ひとつには、近代国家以前の古代の思想家という扱いである。ホッブズ(およびマキアヴェッリも)が近代国家の理論家と位置付けられていたことの裏返しとして、トゥキュディデスは別の時代の思想家だという認識が横たわっているわけであり、古代と近代という二つの時代を分けて考える歴史感覚がそこにはうかがえる。もうひとつは、歴史家であるということであり、マキアヴェッリおよびホッブズが理論家であるのとは区別されるということである。

(5) ひるがえって、トゥキュディデスがマキアヴェッリおよびホッブズと同列に並べられていた際、そこでは、古代と近代の違いや歴史家が理論家かという区別が、もはや重要ではなくなっていた。実際、1960年代以降に当時の冷戦状況を読み解く知的源泉としてトゥキュディデスを捉えた研究などでは、古代ポリスと近代主権国家との違いは顧みず、いずれの時代にも国際社会はそれらよりも上位の権力がない無政府的な場であるという点の方に關心が移っている[e.g. Fliess 1966]。そうした構造の不変性が着目されればこそ、数千年にわたり同じ場を扱ってきた普遍的な理論として三名の思想家を並列に扱うことも可能になったわけである。

(6) ただし、このことが持つ意味は逆説的である。というのも、古代のトゥキュディデスから近代のホッブズまで連続と続く伝統という歴史記述が、まさに歴史というものを無意味なものとして閉却することによって成立しているからである。そこにおいては、トゥキュディデス、マキアヴェッリ、ホッブズという思想家それぞれに持たされていた固有の意義は失われ、彼ら三名は単に、どの時代にも現実主義という発想があったという、そのことを示す道具としてのみ名前が触れられているわけである。そしてまた、そうすることによって、国際関係論は、現実主義を中核として自らのディシプリンの独立性を訴えることができるようになったのである。トゥキュディデス マキアヴェッリ ホッブズという思想史記述の型は、歴史というものに目

を向けさせないように仕向ける歴史の体をとった表象であって、そのような型を支えとして確立された「アメリカの社会科学」としての国際関係論の本質は、単に歴史に目を向けず一般理論に走るという点よりも、歴史を巧妙に排除している点にこそあると言える。ひるがえって、トゥキュディデス マキアヴェッリ ホップズ型記述とは、同学問のそうしたあり方を可能にする特異な装置である。

(7) 最後にこうした一般理論への傾きは、国際関係論という一分野に限られたことでなく、隣接する政治理論においても起こってきたことではないかと思われる。研究背景にも記した、ロールズによる規範理論の復権といった動きは、まさにトゥキュディデス マキアヴェッリ ホップズ型記述の定着と並行する時期に起こっていたことである。ただ、この点については、当初の予定にもなく十分な検討に至らなかったため、今後の課題としたい。

#### <引用文献>

- Armitage, D. 2013. *Foundations of Modern International Thought*. Cambridge University Press.
- Boucher, D. 1998. *Political Theories of International Relations: From Thucydides to the Present*. Oxford University Press.
- Cox, M. ed. 2000. *E.H. Carr: A Critical Appraisal*. Palgrave.
- Donnelly, J. 2013. "Realism," in S. Burchill and A. Linklater eds., *Theories of International Relations, 5<sup>th</sup> ed.* Palgrave.
- Doyle, M. W. 1997. *Ways of War and Peace: Realism, Liberalism, and Socialism*. W.W. Norton.
- Fliess, P. J. 1966. *Thucydides and the Politics of Bipolarity*. Louisiana State University Press.
- 藤原保信. 1979. 『政治哲学の復権 新しい規範理論を求めて』新評論.
- Geuss, R. 2008. *Philosophy and Real Politics*. Princeton University Press.
- Holsti, K. J. 1967. *International Politics: A Framework for Analysis*. Prentice-Hall.
- Jackson, R., and G. Sørensen. 2016. *Introduction to International Relations: Theories and Approaches, 6<sup>th</sup> ed.* Oxford University Press.
- Lebow, R.N. 2003. *The Tragic Vision of Politics: Ethics, Interests and Orders*. Cambridge University Press.
- Morgenthau, H. J., and K. W. Thompson eds. 1950. *Principles & Problems of International Politics: Selected Readings*. Alfred A. Knopf.
- Olson, W. C., and A. J. R. Groom. 1991. *International Relations Then and Now: Origins and Trends in Interpretation*. Harper Collins.
- Palmer, N. D., and H. C. Perkins. 1953. *International Relations: The World Community in Transition*. Houghton Muffin.
- Waltz, K. N. 1959. "Political Philosophy and the Study of International Relations," in W. T. R. Fox ed., *Theoretical Aspects of International Relations*. University of Notre Dame Press.
- Wight, M. 1960. "Why Is There No International Theory," *International Relations*, 2(1).
- Williams, B. 2005. *In the Beginning Was the Deed: Realism and Moralism in Political Argument*. Princeton University Press.
- Williams, M. 2005. *The Realist Tradition and the Limits of International Relations*. Cambridge University Press.

#### 5 . 主な発表論文等

[図書](計3件)

- 葛谷 彩、芝崎 厚士、西村 邦行 他、ナカニシヤ出版、「国際政治学」は終わったのか 日本からの応答、2018、219 (108-123)
- 葛谷 彩、小川 浩之、西村 邦行 他、晃洋書房、歴史のなかの国際秩序観 「アメリカの社会科学」を超えて、2017、249 (19-36)
- 大矢根 聡、石田 淳、西村 邦行 他、勁草書房、日本の国際関係論 理論の輸入と独創の間、2016、190 (108-123)

#### 6 . 研究組織

(1)研究分担者

なし

## (2)研究協力者

なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。